

絵ごころ

蜜瀬かえで 著

「オース、じゃあ、この間の課題返すから、出席番号順に前まで取りに来るように」

素描のメガネ教師が宣言した途端、教室内の空気がピリッと緊張した。

美術科の授業は、その大半が実習形式で、提出した課題にはA～Fの評価が付いて戻ってくる。

その評価がそのまま成績に反映される訳なんだけれど、それ以上に自分の実力が明確にランク付けされてしまう、ってことの方が重要だ。

Aをもらえるのは一回に1人か2人。Bがもらえたら嬉しいほうで、大抵はC。Dはもう少しがんばりましょうで、よっぽどじゃないとFなんかはつかない。

今も、短い講評をもらいつつ、B判定に喜んだり、Dが付いたとうなだれるクラスメイトたちの一喜一憂を、あたしは冷めた目で教室の一番後ろの席から眺めている。

あたしにとってこの教室には、一緒に喜んだり、落ち込んだりするような友達って一人もいないし。

（まあそもそも、どうせあたしは毎回Aしかもらわないから、別にドキドキもワクワクもないんだけどさ）

別に自分の絵がそこまでスゴい上手いとか余裕ぶってるわけじゃないけど。他の子の絵と比べてみると、あたしの絵のレベルが飛び抜け高いのは一目瞭然だから。

実際、授業中にちゃちゃつと描いた絵でも、毎回Aをもらえてるし。

他の子たちが放課後まで残って課題に取り組んでいるのも知ってるけど。

あたしは別に石膏像とかティッシュ箱なんかを時間かけてまで描きたいとは思わない。

そんなの描くくらいなら、ダンゼンお料理研で未佑の絵を描いてる方がずっと楽しい。

未佑の作った料理も食べられるしね。

そんな感じで、課題の評価をあたしがまるで気にしてないのは、クラスメイト達からしたら腹立たしいことらしいんだけど、興味が無いのだからしょうがない。

返却が自分の番になって、前まで取りに行く間にもあからさまな視線を向けられたり、ヒソヒソ話されたりするけど、別段そういう僻みというか、その子たち自体にも全く興味ないし。

全部スルーして、眼鏡教師のトコに行って、さっさと課題を受け取った。

まあ、確認しなくたって、今回も当然Aなんだろうけど。ただ、そのとき、眼鏡教師がニヤリと人の悪笑みを浮かべたのが気になって。

一応、確認をする。

今回の課題は、身の回りの道具ってことで、あたしはなぜかザルを描かされたんだけど……。

うん。

自分でいうのもなんだけど、まあまあ上手く描けてると思うし、さつきBもらった子の絵よりもずっと出来が良い。

目の大きさや数も正確に捉えられてるし。

これならまたA間違いないだよな。

そう思って、あらためて評価を確認したら、

「……あれ？」

わたしの所属する『お料理研究会』は『研究会』って名前だけど、一応れっきとした『部』として認められていて、生徒会からもちやんと予算が下りている。

じゃあ、なんで『研究会』なのかっていうと、それはこの部が『お料理を研究する会』だからなのです。

こう言っちゃうとそのまんな気もするけど、創設者の部長が言うには、

「お料理ってね、やつぱり慣れだと思ふの。

上手くなりたいって思ったら、いろんな料理にチャレンジしてみるのもいいけど、

普段作ってるものだって、例えば分量を少し変えてみたりして、

どんな風に味が変わるのかなとか、

切り方を厚めにしたらどうなるかなとか、

いろいろ試してるうちに、なんとなくコツがわかってくるものなの。

だけど、おうちでそういうことしようとしたら、やつぱりお夕飯とか失敗できないことが多いじゃない？

でも失敗することを怖がったら、料理の幅も広がらな

いし。

だから、ここでは失敗することも当然有りで、いろいろ実験してみましよう、って。

そういう部活を試みたかったの」

というわけで、わたしが入部して一番最初の活動は、お米の研ぎ方の研究だった。

お米を研ぐって一言で言っても、いろんなやりかたがあつて。その中でもどれが一番おいしくご飯が炊けるのか、わたしたちは家庭科教室の炊飯器を全部並べて実験を行なったのだ。

結果は意外とどれも普通に美味しかったんだけど、わたしが一番驚いたのは、軽く研いだだけのほうが、わたしが普段している洗い方よりも美味しく感じられたということ。

それも部長が言うには、

「最近では精米の技術も進歩してるから、あんまりゴシゴシあらわなくても大丈夫みたい。むしろ洗い過ぎちゃうと、お米のうま味まで流されちゃうから」

それは、これまでずっと祖母直伝の拌み手洗いを実践してきたわたしには、ほんとビックリするような話で。

その晩、祖母に「これで冬の寒いときも、手が冷たくな

くてすむねっ」って、思わず電話で報告せずにはいられないくらいだった。

ちなみに、そのときのご飯はもちろん食べきれなかったから、家庭科教室の冷蔵庫に保存してあつて、おかずだけ作ったときなんか解凍してちよつとずつ食べている。

今日もその予定で、今もお野菜を切ってる横で、自然解凍の最中だ。

レンジを使つて解凍するのもいいけど、一気にやると水分飛んじゃうし、かといって解凍モードだと全然解けないし。

今日は、ちよつとの間、冷蔵庫から出して、ある程度解けてからレンジに入れることにしてみた。

これもまた、お料理研究。

「――さて」

今日の課題は野菜炒めで、一応、普段使ってるような野菜は全部切ったのだけだ。

せつかくだから、何かチャレンジしてみたい。

(うーん、材料で何か試してみようかな?)

そう考えて、冷蔵庫を覗いてみる。

この間、部長が学校の近所の人からたくさんお野菜をいただいたということで、今お料理研の冷蔵庫はスゴく充実

している。

むしろ、早く使わないといけないようなものもあったりして、今日はそれを優先的に選んでただけど……。

「あ、コレ」

時期的に少し早いけど、珍しい野菜をみつけた。

少し考えてから、調理台のそばにいる玉置に向かって声をかける。

「ね、玉置？」

「ん、なに？」

スケッチブックから顔を上げないけど、集中していたわけじゃないみたいで、ちゃんと玉置が反応を返してくれる。

あの日の放課後以来、玉置はお料理研の活動のある日は、こうしてわたしが料理しているそばで、料理ができるまでずっと絵を描き続けている。

玉置が描いてるのは全部わたしの絵だったりするから、少し気恥ずかしかったりもするけれど。最近だと、慣れてきたせいか、反対に玉置が横で絵を描いてないと、変に落ち着かなくなったりして。

玉置が授業で遅い日なんかは、ドアの方ばかり気にしちゃって、部長からニヤニヤされてばかり。

まあ玉置にしてみたら、わたしの絵を描くことも目的な

んだろうけど、それよりもわたしの作るご飯の方を目当てにしている感が否めないのよね。

なので、いま訊ねるのは、いつも料理を試食してくれているお客様の好き嫌いについてで、

「玉置は、ゴーヤとかって大丈夫？」

「ああ、うん。フツーに食べるよ」

ふーん。性格が子供っぽいから、味もてつきり苦いのかダメなのかと勝手に思ってたけど……そっか、大丈夫なんだ。

そういえば、味付けもわたしが作るみたいなあっさりしたお出汁系が好みみたいだし、意外と味覚は大人なのかもしれない。

そう思っていたら、

「タマちゃんのお母さんって、タマちゃんが小さい頃から好き嫌いとか絶対に許さなかったものねえ」

そんな部長の言葉に、玉置はあからさまに嫌そうな顔をする。

「もうっ、みっちゃん。やなこと思い出させないでよ」

どうやら、味覚が大人っぽいのではなくて、小さい頃から矯正され続けた結果らしい。

(ということは、もしかしたら、玉置のお母さんの味付け

もわたしみたいに薄口なのかも)

訊いてみたいけど、玉置に母親のことはNGらしくて、本当に不機嫌そうだったから、今日のところはやめておくことにする。

冷蔵庫から取り出したゴーヤを持って、調理台に戻った。

——さて。

実は、何回か食べたことはあるけど、自分でゴーヤを調理するのってこれが初めて。

でも、前に見た料理番組でゴーヤの特集をやっていたから、下拵えのやり方は分かっている。

番組で作ったのは、ゴーヤチャンプルーだったけど、あれも野菜炒めみたいなものだし。

お豆腐はないから、代わりに卵を多めに入れて、味付けは玉置の好みに合わせて鰹節を利かしてみようかな。

うん。ゴーヤがどれくらい苦いのか、ちよつとろ覚えだけど、下拵えをちゃんとすれば苦みは抑えられるって言うってたし、多分、このイメージの通り作れるはず。

「じゃあ、まずはゴーヤの中をくり貫いて……」

「ごちそうさまあつ」

「はい。お粗末さまでした」

思っていたよりゴーヤの苦みは強めだったけど、他のお野菜もたっぷり入ってたし、魚肉ソーセージも一緒に炒めていたから、その苦みもちよつとしたアクセントみたいに上手く利いてくれて。自己評価では七〇点というところ。

次は、もう少し卵を頑張らないと。

そうやって厳しめに採点してるわたしに対して、玉置はお腹いっぱいのご機嫌笑顔で、

「未佑のご飯、今日も美味しかったよっ」

「ありがとう」

そんな玉置の笑顔を見ると、こつちまで嬉しくなってくる。

うん。やつぱり食べてもらって美味しいって喜んでもらえるのが、わたしも嬉しいし、作り甲斐があるな。

けど、それで気を抜いてちゃいけないよね。

次は、もつと美味しく作れるように、今回の反省点をちゃんと生かさないと。

そんなふうにながしが拳を握りしめていると、

「ちなみにタマちゃん、私のはどうだった？」

食後にお茶を入れてくれていた部長が、玉置に訊ねた。

「みっちゃんのはやっぱ味濃いよ。ご飯には合うけど、あたしはもっと薄味が好き」

……玉置、ほんと部長にはズバっというわね。流石、幼なじみだけあって感想もストレート。

「んー。やっぱりタマちゃんは手厳しいわね」

けど、部長も慣れたもので、別段気を悪くしたふうでもなく、わたしたちの前に、入れたばかりのお茶を並べてくれる。

さすがは部長。対応も大人だなあ。

玉置に悪気がないのはわかるけど、それでもあんな言い方されたら、わたしだったらむっとしてしまいかも。

「わたしは部長の味付け美味しいと思います」

「ありがとね、みゅーちゃん。でも、まだまだ頑張らないとっ。なんたって、私の目標は『みんなが美味しいご飯』だもの」

「はいっ、わたしも頑張りますっ」

部長の向上心に負けてられない。わたしも、もっと美味しい料理が作れるように頑張らなきゃ。

「それで、タマちゃんはどうか？」

「あたし？」

「いい絵は描けた？」

「あー、うんっ。……見る？」

訊ねたのは部長なのに、わたしの方へ期待のこもった視線を向けてくる。

「うん、見せて。今日はどんな絵描いたの？」

最初の頃はずっと、わたしに絵を見られるのを嫌がってた玉置だけど、最近では玉置なりに上手く描けたと思ったときには、こういうふうに見せてくれるようになった。

玉置が開いたスケッチブックを、わたしは部長と一緒にのぞき込む。

「あら、今回はフライパンで炒めるところなのね？」

ちようどわたしが野菜をフライパンに入れようとしている一瞬が切り取られて、スケッチブック上に描かれている。

「なんだろ。今日のは少し雰囲気柔らかい気がする……」

「わかるっ？ 今日少し、鉛筆の使い方変えてみたんだっ」

目をキラキラさせて、自慢げに玉置が言った。

「うん。……描いてもらった自分で言うのは、少し恥ずかしいけど。このわたし、すごく優しい感じに見える」

「そうね。みゅーちゃんの印象がとてよく伝わってくる
絵だと思うわ」

「へへ。それほどでも、ないかな？」

「ううん。やつぱりさすがだよ。たしか授業の課題でも毎
回Aをもらってるんでしょ？」

「え？」

「ほら、このあいだ玉置を探してたとき、わたし、玉置の
クラスにも行ったの。そのときクラスの子が言ってたよ。
『姫路さんの評価はいつもAだ』って」

まあ、言ってた子達は玉置を褒めて言ってたわけじゃな
いんだけど。

「あー。それ……」

あれ？

なぜか玉置がわたしから目を逸らす。

え？ わたし、いま何か悪いこと言った？

「？」

わたしが、頭に疑問符を浮かべていたら、

「……タマちゃん」

わ！

いきなり隣から差し込まれた声に、思わず肩がビクつと
なった。

って、今の……部長？

声の雰囲気はひんやりしてたせいで、一瞬気づかなかつ
たけれど、

「何か、隠してるんじゃない？」

目は笑ってるんだけど。なんだろう。あれは絶対笑ってな
い気がする……。

「な、なんにも隠してないっ！」

「なんだ。そうなの。じゃあ、私、今からちよーつと職員
室に行ってくるけど……いいわね？」

「ごめんなさいっ！」

早っ。

驚くほど早い変わり身で、玉置が直角に頭を下げた。

「何か、隠してるのね？」

「……はい」

「何を、隠してるのかしら？」

「え、えーと」

………

「実技の課題が、F評価？」

「……はい」

「しかも、この間からずっと？」

「……はい」

「どの教科でも？」

「……はい」

「なんで、早く言わなかったの？」

「……はい」

『はい』じゃないでしょ？」

「……はい」

地面に正座させられた玉置は、部長が訊ねるたびに、首をすぼめて小さくなっていく。

「えっ。でも、玉置のクラスの子は、玉置はいつもAばかりだって……」

あの子達の憎々しげな表情は、絶対嘘言ってるふうじゃなかったし……。

「……それ、多分、バレル前」

「え？ バレル？」

「……うん。……ほら、このあいだ職員室で未佑にジャガ芋ぶつけられたとき……」

「えっ。あ、うん……。あのときはほんとゴメンね？」

あのときは夢中だったから、思わず玉置に向かって堅いおジャガを投げてしまつて。怪我はなかったけど、転んだ

玉置は少しの間、気を失ってしまつて……。

「あああつ、そうじゃなくてっ。あたし、実はあのとき寝不足でぼんやりしてて、課題と間違えて、普段持ち歩いてるほうのスケブを先生に出しちゃつてて！」

「？ それが？」

「それで、あたしが描いた未佑の絵、全部先生達に見られちゃつて」

う。それはちよつと、恥ずかしいかも。

玉置の持ち歩いているスケッチブックって、ほとんどわたししか描いてないし。

でもやつぱり、それと玉置の課題の点数にどういふ関係が……

「あの絵で、あたしがこれまで提出してた課題、全部手抜きだつたつて。先生たちにバレちゃつた」

いやゝ。ははは。

なんて、急にわざとらしく明るいノリで、参っちゃつたアピールする玉置だったけど。

「タマちゃん」

「はいっ！」

ずっと黙っていた部長に一言で、すぐに背筋を伸ばした。「そのF評価のついた課題、今ここにある？」

「ロッカーの、ロケットランチャーの中に全部……」

「じゃあ、いますぐ持ってきたさい。三分っ！」

「はいっ！」

言うが否や、玉置は家庭科教室を飛び出していった。

……で、残されたわたしたちはというと、

「……はあ」

玉置が飛び出して行った途端、部長はすぐ疲れた顔で、テーブルに沈み込んでしまった。ついさっきお茶を飲んだときまでは、ほんとにこやかだったな雰囲気だったのに……。

（さっきも別の意味ではにこやかな顔をしてたけれど……）

「みゅーちゃん」

「はい！」

わたしにも玉置のがうつってしまったみたいで、部長に名前を呼ばれて、思わず背筋が伸びてしまう。

それに苦笑されて、恥ずかしくなつて居住まいを正すわたしに、

「あんな子だけど、みゅーちゃんはこれからも仲良くして

もらえるかしら？」

「え？ はい。もちろんですけど？」

なんでそんなこと訊くんだろう？ と、一瞬不思議に思いつつ、普通に頷いたけれど。

（あ、そういえば）

すっかり忘れてたけど。

確か最初は部長にお願いされて、玉置と仲良くなろうとしてたんだった。

それが表情に出てたみたいで、わたしの顔を見ていた部長が頬を和らげる。

「じゃあ、一つだけ。憶えておいてほしいことがあるの」
その口振りに、わたしは何か重要なことを言われるんじゃないかと、一瞬ドキとしたのだけど、

「あの子……おバカなの」

「……へ？」

「みゅーちゃんが思ってるよりも、ずうーつと、おバカなの」

「えーと……」

思わず、何も言えなくなつたわたしを見上げて、一度くすつとほえんだ後、

「そんなタマちゃんだけど、できればこれからもよろしく

おねがいします」

「……これは、さすがに」

「タマちゃん……」

言いつけの通り、玉置は三分で戻ってきて、わたしたちの前に数枚の絵を並べた。

今はそれを早速確認していたんだけど……。

並べられた絵に、わたしは苦笑いしかできなくなって、部長はまた頭を抱えてしまった。

どれも確かに”上手”には描けていて、わたしに同じように描け、つて言われても、絶対無理なレベルの絵ばかり。

でも、どこがどう悪い、とか上手く説明できるほど詳しくはないけれど、どれも単に『見て描いただけ』って感じで。これまで玉置の絵を見てきたわたしには、全然物足りなく感じるのには確かだった。

「だって、しょうがないじゃん。そんな石膏像とか別に描きたくもないんだし」

「だけどタマちゃん。先生には、『これからは普段描いてる絵との相対評価で点数を付ける』って言われたのよね？」
「そうっ！ あの眼鏡、薄ら笑いで『よかったな、おまえだけ特別扱いだ』って。何が特別よ！」

そう玉置は憤慨するけれど。

先生が嫌みを言いたくなるのもじゅうぶんわかる気がする。

じゅうぶん上手い出来とはいえ、さすがに普段描いてるものと同じまで違つてると、ね？

「ちゃんと描かないと、ずっとF評価のままよ？ わかっている？ この点数がそのまま成績に反映されるんだから」

「それは、わかつてるけどさ……」

「成績悪いままだと、タマちゃんのお母さんに連絡行くかもしれないわよ？」

「それは絶対ダメ！」

「なら、授業の課題もちゃんとやらなきゃ」

論すような部長の口調に、玉置はすねた顔で視線を逸らし、

「あたしだって、それなりにいろいろ頑張ってみたし……」

「いろいろって？」

「描き込みを増やしてみたり、さ。時間かけて何回も描き

直してみたり。さっきの未佑の絵だって、いろんな描き方を試す練習のつもりだったし……」

「それでもずっとF？」

「もう、これ絶対いじわるだよ」

そう言って完全に開き直ってしまった玉置には、これ以上の説得は無理そうだった。

そもそも、玉置自身「頑張ってる」と言ってるのに、「手を抜くな」なんて説得は何の意味もない。

一応、課題を何枚か確認してみたけど、確かに玉置が今言ったような試行錯誤の跡が見えた。けど、どれもやっぱりいつもの玉置の絵には及ばなくて、結局『見て描いただけ』って印象からは、全然抜け出せていない。

「多分、タマちゃんって、考えるよりも感覚で描いてるところが大きいから。絵を描くときのモチベーションがそのまま出来映えに反映されちゃうのね……」

部長も、困ったふうに頬に手を当てる。

（やっぱり、これって玉置自身の心の持ちようの問題で、わたしたちがどうこう言ってもどうにもならないものなのか……？）

そんなふうには完全にお手上げ状態だったのだけど、

「あれ？」

困ってても手持ちぶさたなだけなので、もう一度玉置の描いた課題を見直していたら、その中に一つ、気になる作品を見つけた。

他の絵と同じで、玉置が普段描いてる絵には遠く及ばないんだけど、それより気になったのが。

「ちよつと、玉置。さっき描いた絵、見せてくれない？」
「？ いいけど？」

玉置から受け取ったのは、さっきも見せてくれたわたしが炒め物をしている絵だ。

その絵と、今の課題を見比べる。

「みゅーちゃん？」

「部長、ちよつと、これ見てください」

「何？ ……ああ」

部長もすぐ気づいたらしい。

「え、なにに？」

「ね、玉置？ これなんだけど？」

「これ？ このザルの絵？」

わたしが見せたのは、玉置が描いたザルのデッサン。

なんでザルなんか課題なのが気になるどころなんだけど、問題はそっじゃなくて、

「で、これがさっき玉置が描いた絵」

「うん。そだね。それが？」

「これにも、ここにね、ザルが描いてあるでしょ？」

「うん。ある」

玉置が描いたわたしは、炒め物をしている最中で、ちょうどお野菜をフライパンへ入れようとしている場面。そして、わたしの手には、切った野菜を入れてたザルがある。

「この二つ、見比べてみて」

「ん？ ……あ、ああっ！」

そこでようやく玉置も気づいた。

「なんか、わたしこっちはちゃんと描いてる！ なんで！」

「それは、こっちが訊きたいんだけど……」

「ねえ、タマちゃん。試しにこれ、描いてみて？」

そうやって部長が持ってきたのは、ご飯をよそうおしゃもじだ。

「うん、別にいいけど？」

玉置は二つ返事でスケッチブックに向かい、もののすぐにおしゃもじを描き終えてしまう。

けれど、

「やっぱり、みゅーちゃんの絵には及ばないわね……」

「そうですね」

上手いけど、やっぱりこれも『見て描いただけ』。

「じゃあ次は、はい」

「え？」

そのおしゃもじを、今度はわたしに手渡し、傍のイスに座らせた。

「今度は、みゅーちゃんが手に持つてるのを描いてみて？」

「？ うん、わかった」

「時間のこともあるし、描くのはみゅーちゃんの手だけでいいから」

「了解」

そうして、今度は少し時間をかけつつ完成した絵は、

「このおしゃもじ、さっきのと全然違う……」

わたしの手に握られたおしゃもじは、さっきまでの無味乾燥な絵と違って、しつかりとした存在感が感じられるようになっていた。

手の柔らかさがちょうど対比になってて、その境界でおしゃもじの堅さが目で分かるようになってる。

しかもそれだけじゃなくて。わたしの手で触れているところから体温が移って、おしゃもじがほんのり温かくなっているのまで伝わってくるから、驚きだ。

「なんでだろ？ 描いてても鉛筆のノリが全然違ったんだよね」

描いた本人も不思議そうな顔だけど、部長は一度頷いて、「じゃあ、最後に……みゅーちゃん、今度はちよつと立つてもらってもいいかしら？」

「あ、はい」

部長に言われて、座ってたイスから腰を上げる。

そのイスを部長は玉置の方へ押し出して、

「このイス、描いてみて？」

「? ? ?」

わたし同様、玉置も部長が何を言いたいのがよくわかってないみたいだけど、今度も言われた通り描き始めて、

「あれ? あれれ?」

「どうしたの? 玉置?」

「え、あれ、ちよつと。待って。あれ?」

言っている間にも、完成した絵を玉置はわたしたちに向けた。

「なんか、また描けた」

「え! ?」

うわ、確かに普段の玉置のクオリティでイスが描けてる。しかも、今度はわたしの一部分も入ってないのに。ほんと、どうして?

「多分だけど。みゅーちゃん自身じゃなくても、みゅーち

やんの近くにあったり、みゅーちゃんが触ったあとの物でも。みゅーちゃんにさえ関係してれば、何でもモチベーションにつながるみたいね」

え、それ……

「やめてよつ、みつちゃん! それ、なんかあたしが変な人みたいじゃないつ。未佑も引かないでよお」

「え、だって……」

ねえ?

「ちなみに、タマちゃん。今このイスを描くときって、どんなこと考えてた?」

「ん? 考えてたこと? えーと……」

顎に手をやった玉置がわたしの方をちらつと見て、

「さっき未佑が座ってたときのこと、かなー」

「具体的には?」

「少し緊張してたなー、とか。ほら、普段こんなふうに向かっただけ描いたりしてないし」

(確かに……)

いつもは自然体でいるのを玉置が勝手に描いてるような感じだから。手だけとはいえ、ちゃんとモデルするのって初めてで、ちよつとだけ身構えてしまったのはほんとだ。

「多分、そのせいでイスの堅さとか余計気になったから、何回もお尻の位置直そうとしてたんだろうな、とか」

(う、また当たり……)

「よく見てるわねえ？」

「あと、あたしが真正面にいたからかもしれないけど。じつとしてたら、未佑、途中で太ももの見えてるトコが気になりだしたみたいで、スカートのはじつこの方、反対の手で伸ばしたりしてたし」

(えっ！？)

「あらあら」

「それでまた変に力入っちゃって、こう、太ももをぴったりに合わせてるところが赤くなってる。それ思い出したら、今度は、未佑の太ももが乗ってたあの辺、まだ温かいのかな、とか考えちゃって」

(っくくくく！)

だんだん顔が熱くなる

「まあっ」

「あのはじつこのところ、時々膝裏とももとできゅつと挟むみたいにしたの、なんかいいな、なんて」

(くくくくくくくくく！)

そこで流石にわたしの恥ずかしさが限界を迎えた。

というか、玉置、部長にほだされて途中から自分ですんごいこと言ってるのに気づいてない！

「くくくく、玉置のばっ！」

「っ！？——未佑っ！？」

いきなりわたしにおしやもじではたかれて、玉置はまだ何がなんだかわからないって様子だったけど。

わたしはそのまま後ろを向いて、熱くなった頬を手で覆って、なんとか冷やそうとしてたら、

その間でようやく玉置が、

「……あ。

あつ。

ああああっ！？

違うの、未佑！

そうじゃなくて！

って。そうんだけど！

別に変な意味とかじゃなくて！

単にそう思っただけというか！

そう、ちよつと考えちゃっただけ！

魔が差したの！

普段からずっとそんなこと考えてる訳じゃないから！

そう！

偶々！

偶々さつき地面に座ったときに、未佑の太股が同じ高さにあったからそれで！」

「もうっ、知らないっ」

「違うの、未佑ーっ」

手を伸ばしてきた玉置を避けて、わたしはそのまままだ片づけてなかった食器に手を伸ばした。

「片づけるから！ 邪魔しないでっ！」

そう宣言して、わたしは無心になるための洗い物を開始する。

それでも着いてきた玉置が、

「違うからね、あたし、変なんじゃないからね！」

「……」

「全然、未佑が思ってるようなのじゃないから！」

「……」

「普段は未佑の太ももなんて、全然興味ないんだから！」

「……」

「むしろ今は、さつきのあたし、何でそんなトコを気にしてたのよ？ ってかんじ！」

「……」

「て、違う！ 今の『そんなトコ』は悪い意味なんかじゃ

ないからね！ 全然深くは気にしてないって意味だからね！」

「……」

「じゃなくて！ これも全然、未佑の太ももが魅力的じゃないって意味では言っていないから！」

「……」

「むしろ未佑はもっと太ももに自信持っていないよ！」

（……………っっっ！）

「あたし、未佑の太もも大好き！」

「もう恥ずかしいからっ、太もも太もも言わないでよ！」

我慢しきれなくなって叫ぶわたしに、慌てた玉置がまた

変な言い訳を始めて、またわたしが叫ぶ。

そんなことを延々繰り返すわたしたちを眺めつつ、部長は一人、テーブルで冷めたお茶をすすっていたけど、

「——解決策、見つかったわね」

満足げな顔で頷いた。

ただ、それをわたしたちが改めて聞くまでには、もう少し

し時間がかかる。

それから数日後の職員室。

「クソつダリいー」

教師にあるまじき悪態を吐きながら、素描担当の眼鏡教師は、今日も今日とて授業で集めた課題の採点に追われていた。

念のため言っておくと、彼女は特にそこまで教育熱心な教師というわけではない。

絵自体は、見るのも描くのも好きだが、それを生徒に教えることに情熱なんて持ちあわせてないし。というか、教える暇があるなら、自分の作品づくりに打ち込みたい派だ。

まあ、だからこそ、やりたくないことはさっさと済ませるに限る、というわけで。

課題も集めたら即行で評価して、返却。

生徒たちも、結果は早く知りたいだろうし、ようするに

ウインウインの関係というやつだ。

点数もほとんどファーストインプレッションでつけたようなものだが、別に授業の課題の評価なんて、そんなもんでいいと思う。

良いものは一目見ればわかるし、悪いものもしかり。

まあ、ほとんどが良くも悪くもないものばかりなのが困りどころだが、ぱっと見て荒が見つかればちょい下げて、良いところあればちょい上げる。そのくらいの採点方式でも別に文句はないだろう。

というか、文句なんて言わせねー。

(こちらら、授業のたんびに全員分に目を通さなきゃならんのだから、毎回毎回まじめに採点なんてしてらんねーんだよ)

まあ、それも自分で蒔いた種。自業自得ではあるのだが。彼女の担当する素描の授業では、授業中の作品は毎回提出することになっている。

そうすることで、授業中の評価だけで成績を付けることが許され、面倒な定期テストの実施をパスできるのだ。

もちろん、同じ実技系の科目でも、定期テストを実施する教員は多い。

ただその場合、テストの準備から採点作業まで、厄介ご

とに数日を煩わされることになる。

反対に、普段からコツコツ面倒を処理しておけば、テスト期間中のまとまった時間が完全にフリーだ。

しかも、テストだと生徒からも色々と文句を付けられやすい採点も、毎回の課題ならテキストでも文句は少ない。すべては、後から楽するため。

そのために、今日も今日とて、悪態を付きながらもやりたくない作業を行なっているのだ。

まあ、これをやってる間は、変な雑務とか押しつけられないのが良いところなんだけど。

あと、ほんの時たまだが、中々おもしろい絵を描く生徒もいて、それをあげつらうのも一興と言えば一興だった。

「と、噂をすれば、だ」

お次の絵は、あの姫路玉置サマの作品だ。

数週間前に課題への多大な手抜きが発覚したあのお嬢様には、他の教師たちとも示し合わせて、採点を厳しく行なっていくことに決めたのだが。

それ以来、彼女の点数は最低点のF続きで、

「流石にいじめすぎたかなあ」

などと言いつつも、人の悪そうな顔のままなので、タチが悪い。

（さすがにこのままこの点数が続くようなら、何かしらフォローも必要になるし。それはそれでまた面倒だからなー）などと思いつつ、提出された課題に目を向けると、

「お？」

意外なことに、よく描けていた。

いや、彼女の場合、常に絵はよく描けているのだが、これまで提出されたものはことごとく無味無臭の何の面白味もないような絵ばかりだったのだが、

「ほー、なかなか味のある描き方するじゃねーか」

課題はよくある石膏像だが、普段の姫路の絵と違って、今日のデッサンにはモチーフの表情にどことなく生き生きとしたものが感じられる。

お堅いしかめつらが、まるで目の前にいる誰かをにらんでいるみたいだ。

まあ、こういうのもやりすぎると逆にアウトなんだが、この絵はあくまでそういうフレーバーが感じられるという程度。

実際には普段と同様、高い精度で対象を忠実に描いているから、それはほんとにこちらが受け取る印象でしかない。（そういやアイツ、前の絵でもそんな描き方してやがったな。まったく、これだから感覚だけで描けちまうヤツって

のは……)

とはいえ、悪いわけではない。

これなら、やつとD評価を付けてやってもいいくらいの出来だろう。

まあ、別にCをやってもいいのだが、

(ただ一つ、気になるとすれば、ここに何かが足んないんだよなあ……)

石膏像の視線の先、画面の左手をじっと見やりながら、顎に手をやったところで、

「ひいっ」

後ろの方で、若い女性の悲鳴が上がった。

「……ん、何？ 夢ちゃんセンセ。ゴキでも出た？」

「あ、先生……。あの、コレ……」

席が離れているくせに、差し出して来るものだから、しようがなく立ち上がって、隣まで行った。

普通、そっちから来るもんじゃないの？ なんて、嫌みを言おうと思ってたのが、渡されたのがこれまたタイムリに姫路玉置の課題だったので飲み込んだ。

「水彩の課題か」

で、テーマは風景画。

描かれているのは誰もいない校舎の廊下。

見覚えからして、美術科棟か？

教室のプレートもあるし、三階、一年の教室前。

「フム」

廊下全体を固いラインで構成し、時間は日中のようだが光を冷めた色合いで表現しているため、景色の中は、どことなく緊張感が漂って見える。

画面の左端には、開いた教室の入り口があつて、構図から自然と目を引かれるそこは、絵全体の中でも一番明るく、かつ少々異なった色味が使われている。結果、漂う緊張感がここに集約するというわけか。

(緊張感っていうか、この辺の色の表現は期待感か？)

まあ、さつきと同じで、中々よく描けてると思うのだが……

「……ああ。確かに。この廊下の奥んところから、誰か覗いてる気がするなあ」

「ですよね！」

廊下の奥。ちょうど緊張感の始点に当たる階段の踊り場のあたりに、実際には何も描かれていないのに、なぜか誰かがいる気がする。

「これは……おそらく、噂の幽霊……」

「ひっ！」

「そうか、姫路。アイツにも見えたのか……」

「やっぱりなんですかっ！」

「確か、昔、ちょうど階段のあの位置から転落して死んだ生徒が……」

「わーーーーーっ」

「いるわけないだろ？」

「……へ？」

耳をふさごうとしたまま、夢ちゃんは目をまん丸にした。からかうと、おもしろいように反応してくれたので調子に乗ったが、いかんせんうるさい。他の教師たちの目もあるし、悪ノリもこれくらいだろう。

「え？ え？ え？」

「よく見ろ」

「え？」

「こりゃ、笹川だ」

「へ？ ……笹川……ミユさん？ 普通科の？」

「ああ」

確か正しくは『ミウ』だったはずだが。こちらも自信がないので、あえて訂正はしない。

「笹川さんの、幽霊？」

「勝手に殺してやるな」

「生き霊ですかっ！？」

「霊から離れろ」

というか、これでやつと納得がいった。

さっきの石膏像を見たときの違和感。

何か物足りないと感じたあの感覚。

「この絵、恐らくだが……ここに、笹川がいる」

廊下の奥の一点を指す。

「え？ ……いませんけど？ もしかして私にだけ見えない、とか……？」

どんなスゲエ絵だよ、それ。

「じゃなくて。いるんだけど、描いてねーだけ」

「……………あ、ああ！」

夢ちゃんもようやく合点がいったらしい。ほっとした顔を浮かべた。

「よかった……私、今度からあの廊下通るとき、一体どうしようかと、本気で……」

そこまでかよ。

「……だけど、どうしてわざわざそんな変な描き方を？」

「まあ、あのバカのことだから、笹川以外の絵は描きたくないとか、そういう単純な理由だろうさ」

ただ、こんな妙な入れ知恵をしたのは、村越あたりだろ

うが。

元々、姫路が授業の課題に全くモチベーションを出せていなかったのは、誰の目にも明らかだった。

まあ、それくらい入学したての一年なら普通にあることだが。

姫路の場合は、極端すぎた。

絵を描く際のモチベーションが出来映えに影響するのは確かだが、アイツは本当に0か1で。いっそ描きたくないものならば、その印象が絵に出るんだろうけど、無関心なのが一番ひどい。

（私としては、興味が無くてもそこそこの絵にできる技量を身につけてくれりゃソレでよかったんだが……）
ところがどうだ。

（モチーフへの関心が姫路自身にないんなら、他のヤツから借りればいいとか、学生のやることじゃねーだろ）

姫路以外のヤツ——まあ、つまり笹川が、モチーフに対してどんな感情を持つかを想像して、それを姫路自身の主観に代用する。

言うなれば、この絵は笹川から見える風景を姫路が想像で描いたようなものなのだ。

一周回った回りくどいやり方だし、そもそも主観を借り

受ける相手に興味がなきゃ成り立たないような方法だが。

姫路の笹川に対する入れ込みは相当だしな。

笹川がどんなふうに考え、何を思うかなんて、それを想像するだけでアイツには楽しくてたまんねーんだろう。

（ただ、その描き方は姫路の中でまだ確立しきってないみたいだな）

描いてないはずの笹川の気配が絵の中に残ってるのはそのせいだ。

おそらくまだ視点は姫路のまま、構図の中に一度笹川を配置し、その笹川の主観を想像で描いているといった具合か。

それが夢ちゃんには霊のように感じられてしまったのだろう。

（笹川に寄りっぱなしっていうのはあまり褒められたことじゃないが、まあ、今はこれで様子見ってところか）

一応、前よりかは前進はしてるわけだし。

このやり方でどこまで描けるのかつても気になることではある。

まあ、いずれにせよ。

「アイツ、当分こんな感じの絵ばかりになるから、覚悟しといた方がいいよ、夢ちゃんセンセ」

ほっとしたのはつかの間、この姫路の絵に一体どういう評価をつければいいのかで頭を悩ませ始めた夢ちゃんを、しばらく意地悪げに眺めていた。

放課後の目抜き通りを正門に向かってわたしは早足で歩いていく。

「ねーっ、未佑、待ってよおー」

「ふんだ」

「ねーったら。さっきのはホント悪かったって思ってるからさー」

「わたし、玉置があんな変態さんだとは思ってなかった」

「だから、違うって言うてるじゃん。誤解だって」

「とか言って、どうせ家に帰ったら今のわたしの怒ってる顔とか、嬉しそうに描くんでしょ？」

「それとこれとは関係ないじゃん！」

「やっぱり描くんだ」

「だって……」

「また『だって』。玉置ってそんなふう言い訳しいだよね」

「もう、いいじゃん！ 未佑こそしつこいよ」

「しつこいって、言うに事欠いて！」

わたしも好きでプリプリしてるわけじゃないんだから！

それもこれも玉置が恥ずかしいことばかり言うのが悪いんだ。

まだ顔が熱を持って、それを隠したくてずっと怒ったようにしてるだけなのに……。

というか、さっきはあんなに的確にわたしの気持ちを察してたくせに、なんで大事なときに限ってそんな鈍感なのよ！

思わず一瞬、振り向きそうになったけど、今の顔を見られたくないから、慌てて前に戻す。

そしたら。

急に背後の足音が止まった。

「……………」

う。

さすがに、言い過ぎた……？

かも。

でも……

いまさら、照れ隠しだなんて言えないし……

うう。

ううう。

次第に心の中に罪悪感が溢れてきて、息苦しくなって、わたしも足を止めてしまった。

そのとき、

「——甘いもの食べに行こっつ！」

「え？」

突然声を張り上げた玉置に、思わず振り返ってしまうと。

ぎゅっと目を閉じて、両手を握りしめた玉置がまた、

「——あたしがおぐるからっつ！」

その一生懸命な感じを見たら、変に見栄張って意固地になつた自分が子供みたいに思えてしまった。

でも、すぐに素直になるのは気恥ずかしかったから、

「……なんで、いきなり甘いものなの？」

「！」

わたしの声を聴いて、目を開けて、わたしが振り返って たって気づいた玉置は、ぱっと顔を輝かせる。

（くやしいけど……なんかうれしい）

「イライラしてるときは、やっぱり甘いものだって！ 甘いお砂糖いっぱい食べたら、未佑だってきつと、怒って

るのすぐに忘れちゃうから！」

なんとも玉置らしいと言えば、玉置らしい考え方なんだ けど。

わたしもそこまで単純じゃ……

「あたしオススメのあんみつのおいしい店があるの！」

……え？

あんみつ？

あんみつって、あの？

あの、あんみつ？

缶詰のじゃなくて？

ハゴロモじゃなくて、お店の？

「駅前のクレープ屋とかっ！」

クレープ！

前にいたトコじゃ、隣町のお祭りの屋台でしか食べられ なかった、あの！

こっちにきてから売ってるのは何回か見たことあつた けど、屋台と違ってオシャレオーラ全開で、一人で買うの がなんかハードル高かった、クレープ！

「……両方なら……いいわよ？」

できるだけ、こう、しぶしぶって感じで言ってみただ、 なんか内心だだ漏れだった気がしないでもない。

けど、

「うんっ！ いいよ、おごる！ おごっちゃう！」

駆け寄ってきた玉置が、わたしの手をつかんで、

「いこっ！」

「あ、今日はダメ。今日は今から夕飯の支度しないといけないから」

「えーっ」

「今度の土曜とか、どう？」

「休みの日っ？」

「うん」

「いい！ 絶対いい！」

「よし、じゃあ、土曜ね」

「うんっ」

そうして。

なんだかんだ言ってる内に元の調子に戻ってたわたしたちは、仲良く手をつないで正門まで歩いていったのでした。